

## 建築家・西澤文隆の実測図における植物の表現について

西 一 生 \* ・ 川 島 洋 一 \*\*

### On the Expression of Plants and Trees in the Survey Drawings by Fumitaka Nishizawa

Kazuo Nishi, Yoichi Kawashima

Fumitaka Nishizawa (1915-1986), one of the leading architects in Japan, is known not only for his Modern architectural works as a “grandchild disciple” of Le Corbusier, but also for his exquisite survey drawings of Traditional Japanese architectures and gardens. This paper is to consider the background of his expression of plants and trees in his survey drawings. Nishizawa’s early sketches published as the book “The Days in Philippines” and his unpublished notes to his collaborators were examined in this paper.

#### I. はじめに

本稿は、日本を代表する建築家の一人である西澤文隆（1915 - 1986、図 1）の実測活動に関する研究である。西澤は、日本の近代建築を代表する坂倉準三（1901 - 1969、図 2）の下で働き、坂倉亡き後は 2 代目所長として坂倉建築研究所を生涯引き継いだ人物である。ル・コルビュジエ（1887-1965、図 3）から坂倉へと近代建築の本家本流をくむ西澤が、なぜ数多くの日本の伝統建築や庭の実測活動を行ったのであろうか。西澤の実測はあまりに本格的な仕事であり、単なる建築家の趣味として片付けることはできない。西澤は生前、実測図を公にしておらず、その実態を知ることができない幻の実測図となっていた<sup>註 1)</sup>。しかし、1997 年に西澤の実測図展が開かれ、2006 年には『日本の建築と庭—西澤文隆実測図集一』（図 4）が出版されたことで、広く一般に知られるところとなった。図集には未掲載の図面も一部あるが、ほぼすべての図面 91 点が掲載されている<sup>註 2)</sup>。



図 1 西澤文隆

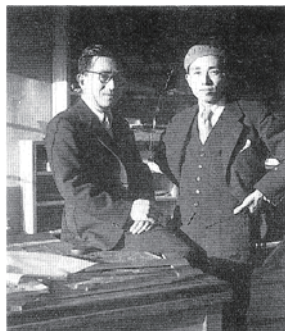


図 2 坂倉準三と西澤



図 3 ル・コルビュジエと坂倉準三

\* 建設工学専攻大学院生

\*\* 建設工学科建築学専攻

## I-2. 研究目的

本研究の目的は、西澤の実測活動の意味を探るとともに、実測という方法自体に着目し、新たにその可能性を見出すものである。本稿では、西澤の実測図に描かれた植物に着目し、考察を試みる。西澤の実測活動以前のスケッチや彼が実測図のトレースを所員に申し付けた未発表のメモが残されており、本稿の資料として分析を行う。ここではとくに、実測図に描かれた植物に着目する。西澤自身が庭と建築の関係を求めていることや、雑誌にも植物について論じたものが多かった<sup>註3)</sup>。西澤は、1955年に写真家・二川幸夫の『庭と建築空間』という本の出版にも協力している。この本は、庭に着目して日本建築を新しい視点から再展望する試みであり、かねてより日本建築に関心を寄せていた西澤は、庭や植物にも造詣が深く最適の人物であったといえる。

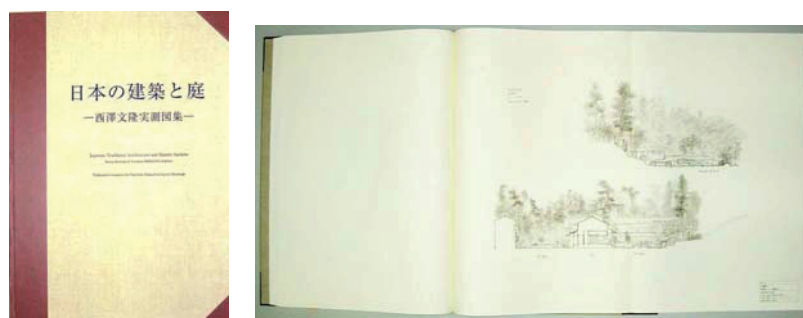


図4 『日本の建築と庭 - 西澤文隆実測図集一』

## II. 建築家の手帖 (1940年代のスケッチ)

まず、西澤が実測活動以前に描いた戦時中のスケッチをもとに考察する。このスケッチは本格的な実測活動を開始する以前に描かれたものであるが、植物への強い関心をうかがわせることから、本稿の分析対象とする。このスケッチは、1968年『フラワーソサイエティ会報』所収の「フィリピンで会った花達」、1977年『建築家のスケッチ集』所収の「フィリピン・パナイ島の民家」など、生前に一部の雑誌に掲載された。西澤没後の2003年には、スケッチ集『フィリピンの日々』が出版されている。

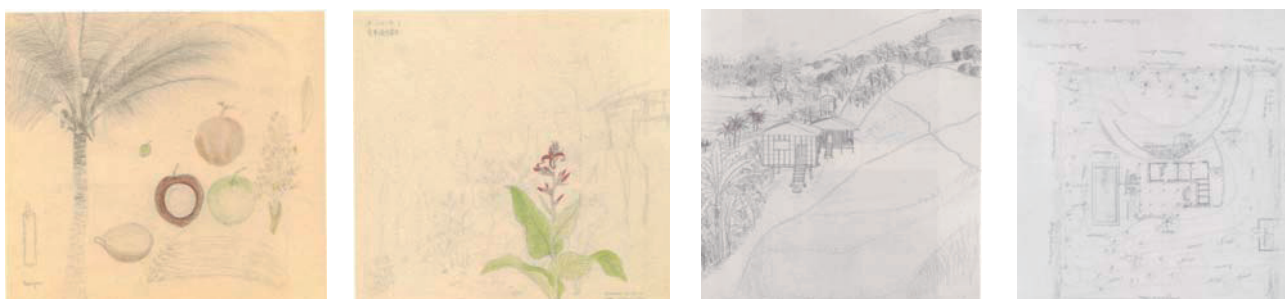
ところで多くの場合、実測は研究や復元的手段であるが、研究者ではなく建築家の西澤がなぜ実測活動へと導かれたのだろうか。彼のドローイングよりその手がかりを探ってみたい。

建築家は数多くのドローイングをつくる。それは建築が完成するまでのあらゆる段階、またあらゆる場面において行われる。それは素早いスケッチから精密な図面に至るまで、その方法はさまざまである。たとえば建築家ル・コルビュジェの手帖を見ても、建築物のドローイングだけにとどまらず、文章などさまざまな表現によって空間体験を記録している。コルビュジェのスケッチには、描いた建築空間に寸法を入れているものが多くある。そこで建築家は、単に見えるものを描いているばかりではない。プロポーションの美しさを発見し、数値によって記録するのである。実測図とはこのようなドローイングの一種であり、スケール(数値)を扱う建築家独自の眼でとらえたドローイングなのである。

西澤のフィリピン時代のスケッチには、さまざまな植物や風景が描かれ、戦時中の過酷な状況を忘れさせるのどかな風景が描かれている。また、現地の建築物の平面図や断面図をスケッチしたのも残されている。西澤の建築と庭のかかわりの探求は、このころからすでに見られ、彼独自の実測活動の原点がここにあったのではないかと想像される。とくに建築物を切断して見る断面の実測は、その後の実測活動において本格的に展開されることとなった。

西澤のスケッチには、植物が数多く描かれている。これは彼独自の視点である。戦時中ということもあって、ジャングルで息を潜めて敵の銃弾を潜り抜けなければならなかったときに、植物は自分の恐怖を和らげ、身を隠し、食料としても生かしてくれる貴重な存在だったのである。西澤は「比島で会った花達は私の肉体の一部となって沁みついている」<sup>註4)</sup>と述べている。

西澤のフィリピン時代のスケッチを分類すると、とくにその着目していたものの特徴がわかる。スケッチは、①植物とその実、②植物と風景、③建築と風景、④建築と植物の4つに分類される。①植物とその実については、植物と一緒にその木の実や花がスケッチされている。②植物と風景は、植物を中心とした風景で、どのような場所に自生しているのかに注目している。③建築と風景についても植物同様、どのような場所に根付いているのか周りの風景と同時にスケッチされている。④建築と植物も、同じようにその場所の環境に共生しており、建築平面図と同時に樹木の名前も記入されている。ここでは4つに分類したが、すべてに共通して、「全体と部分」に着目され描かれているという特徴が看取される。



①植物とその実

②植物と風景

③建築と風景

④建築と植物

図5 西澤フィリピン時代のスケッチ

風景だけを描いていたら画家と変わりがない。西澤は建築家であるからこそ、風景と同時に周辺を描いたのである。彼は建物のスケッチと同時に、その建物の平面図を描いている。断面図のように建物を切ったスケッチは、その内部の構造を知った上で建物を描く建築家の視点である。また、植物の実を切断したスケッチも、そのことに通じているといえるのではないか。

以上、西澤のスケッチはとくに植物に注目し、周りの風景も含めて捉えられている。同様に、建築についても単体ではなく、周辺の環境全体に着目していた。建築を平面図や断面図として描いており、建築家の見方がなされながらも、さらに広い視野で空間を捉えていることがわかる。

終戦を迎えた西澤は、1946年に仕事に復帰した。1948年、32歳で坂倉建築事務所の大阪支所

を任せられる。一方で、西澤にとってはじめての実測活動は 1958 年の六義園で、実測図が残されている。1967 年、52 歳になって彼は本格的に実測活動をはじめており、意外にも人生の後半になってから実測を本格的に開始したことがうかがえる。1969 年 9 月 1 日、師の坂倉準三が逝去した。それを機に事務所名を坂倉建築研究所と改め、組織の代表取締役として再出発をきった。

### Ⅲ. 「実測方法の凡例」に関するメモ —1960 年代後半—

実測図があるということは、その原本としての野帳があるのが普通である。野帳とは、実測記録を記した現場図面のことである。この野帳があれば、仮にその後、建物が失われても復元が可能である。西澤の場合、実測の対象はよく知られた日本の伝統建築や庭であったため、出版物などに図面が掲載されていることがよくあり、実測に先立って平面図をスケッチしておくことが可能であった。現場に行く前に、野帳の下書きを事前に用意することが可能なのである。

一般に、実測は研究者が建物の記録を保存したり、建設当初の姿を復元したりするために行われることが多い。しかし、西澤は研究者ではないため記録や復元を目的にしたのではない。すなわち彼は「建築と庭の関わり」を知りたいことを求めていたと思われる。建築と庭は、建築史ではしばしば別々に捉えられており、建築家である西澤が望む実測図は研究者の本からはなかなか得られなかった。そのため「建築と庭の関わり」を表した野帳を、自らつくる必要があったのである。

実測にあたり、西澤の下調べの方法は、実測する遺構の資料を集め、文献中に載っている図面をトレースする<sup>註5)</sup>。その作業を知る手がかりとして、未公開である西澤文隆のメモ（図 6）からその方法を探る。このメモは下調べや野帳として使われたとされる図面の作り方が書かれている。このメモを所員に申し付け、図面記号の書き方などを「凡例」に従いつくらせている。

本研究において資料を提供いただき、さまざまなご指導をいただいている建築家の澤良雄氏はこのメモの所有者であり、生前の西澤の実測活動に参加された。澤氏の記憶では、このメモは西澤が実測に先立ち、野帳を所員に作らせるための諸注意がメモされたものである。これは、メモの凡例を守って全員が作図することにより、図面表現の統一を図るために必要なものである。また「凡例」を守れば、だれが図面を描いたとしても同じ結果が得られると澤氏は述べている<sup>註7)</sup>。

このメモに描かれた図面リストから、おおよその年代を推測してみる<sup>註8)</sup>。メモは全部で 3 枚あり、A4 版の坂倉事務所用箋である。図 6-1「メモ①」のリストに上げられる春日若宮や大覚寺は 1969 年ごろに実測されている。京都御所なども 1969 年ごろから実測が開始されているため、1960 年代後半と考えられる。また、その他の西芳寺や天竜寺は実測図ではなく「概念図」として、1976 年『西澤文隆小論集 4』に登場する。したがって、この時期までのメモではないかと推測される。

これらのメモを解説すると、「トレース」するときの注意点が書かれている。トレースとは、図面などを写し取ることである。図 6 のメモ①は、トレースしてもらう図面のリストである。メモ②とメモ③には「トレース上の注意」と書いてあり、図面記号が書かれていることから実測図面を作成する際の凡例が示されているメモである。

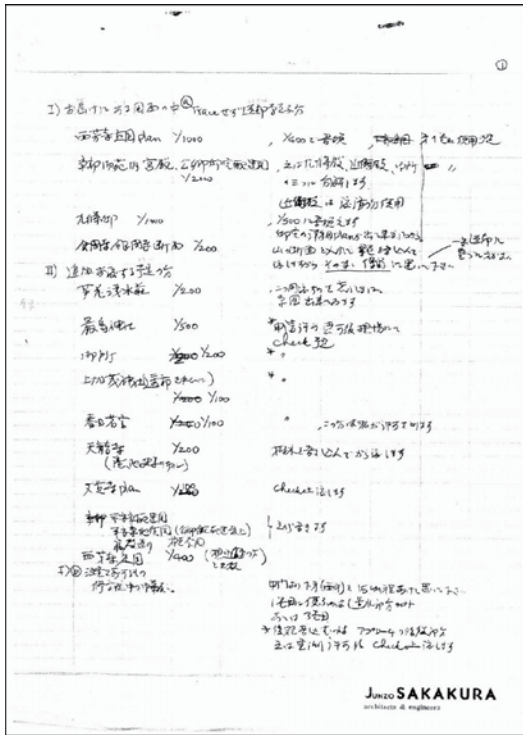


図 6 - 1 メモ①原本

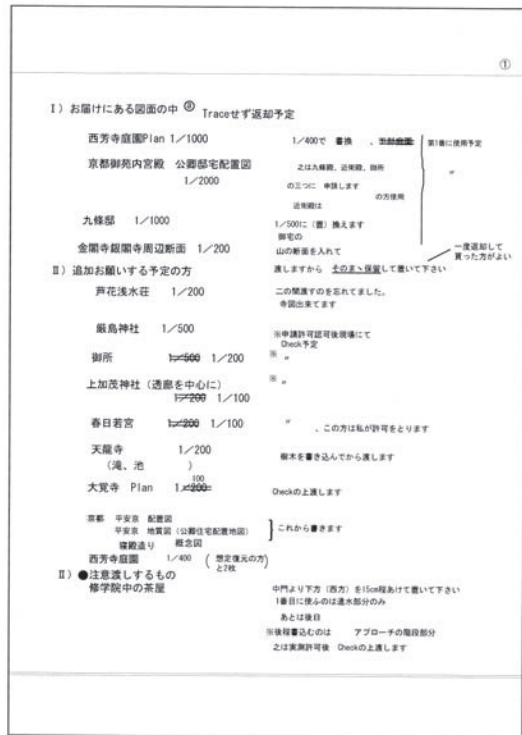


図 6 - 1' メモ①解説

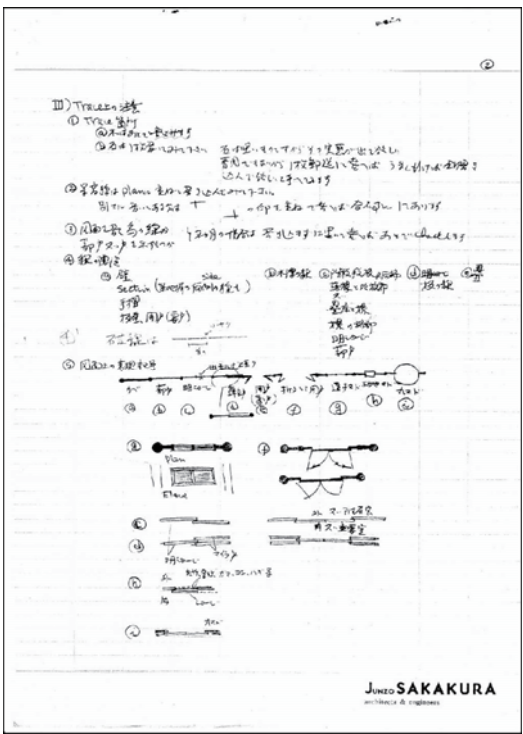


図 6 - 2 メモ②原本

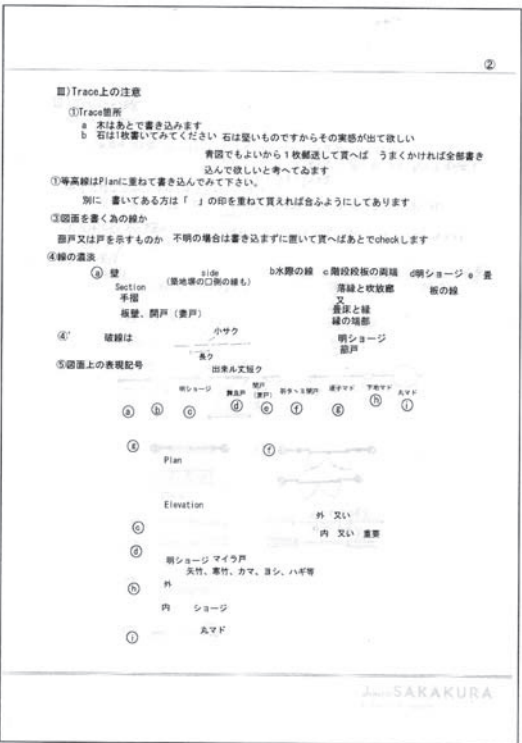


図 6 - 2' メモ②解説

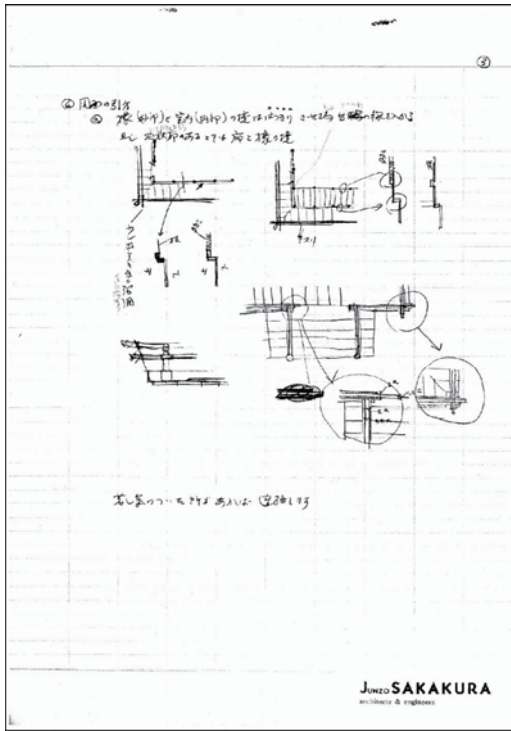


図 6 - 3 メモ③原本

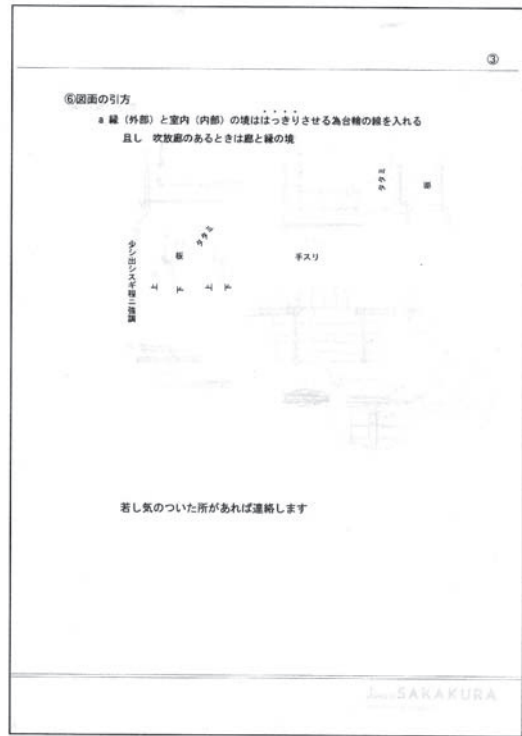


図 6 - 3' メモ③解説

この資料で注目すべきは、「線の濃淡」「図面の記号表現」「内部と外部の境界部分の線の描き方」「石の描き方」などの記述である。とくに自然物は建築物と違って、定規で誰でも描ける線ではない。「建築と庭の関わり」を表現するには自然物をたくさん描くので、フリーハンドの線で描かねばならない。そのため、植物や石の描き方は図面表現を大きく左右するのである。

西澤の実測図の特徴は、その柔らかい鉛筆ドローイングの表現にある。とくに植物や石の描き方は重要で「植物は自分で書き込む」と記入され、「石は実感に注意し一つ描いてみてください」と要求している。植物や石などの自然物は図面の出来を大きく左右するからであろう。実測図は、植物や石を最後に西澤が描いて完成させていることから、柔らかいタッチで描かれた実測図は綿密に意図されたものである。自然物は、実測図を描いた者の見た印象が描かれざるをえない。だれが描いても同じとはならないのである。したがって実測図では、西澤自身が見て体験した空間を表現することが意図されていたと考えられる。

このトレースの作業では、もう一つ重要な意味がある。植物の描き方に指定があるのは、この時点から、共同作業としての意識を高めるためであり、現場で見方の統一を図る効果があるのではないだろうか。このようなメモによって西澤は所員の意識を確かめ、統一させていったのである。建築物をつくることは建築家一人によってできるものではなく、集団活動の中でつくられるものである。西澤自身もこのように語っている。

私はもともと完璧主義に属する人間だが、ここ十年余り、日本の伝統の中で建築と庭の関係を掴み出そうと汲々として実測を続けるうち、物は一朝一夕に一人の手で出来る事さえ稀で、いろんな条件の『たが』をはめられた中で、ただ何かを創り出そうと努力してきた先人のあとに接するにつけ、建築とはつくるものではなく、出来てくるものではないかと思い出した。その中でどうやって作品に自己を迂り込ませるかが創る行為ではないか 註9)

(下線：引用者)

建築するという行為は昔から集団活動であり、協力して作品がつけられてきた。「建築というものはつくるものではなく、出来てくるもの」と述べるのは、建築は創作者の意図により「つくる」というよりも、自然な作用によって建築や庭が「出来てくる」という視点をもっていたのではないだろうか。それが「建築と庭の関わり」を究明する中で、発見した建築家の境地ではないだろうか。建築と庭を一体のものとして捉えているからこそ、このように述べる事ができたのではないだろうか。

ここまでで明らかになったことを整理する。西澤の実測図面の凡例には2つの側面がある。一つは、指定された樹木などの描き方があるということである。これは表現を統一することにより、一人の方針で貫かれた作品となる。その反面、もう一つの側面として彼は共同作業を大切にしており、これらの相反する作業の両立を西澤は試みていたのではないかと考えられる。

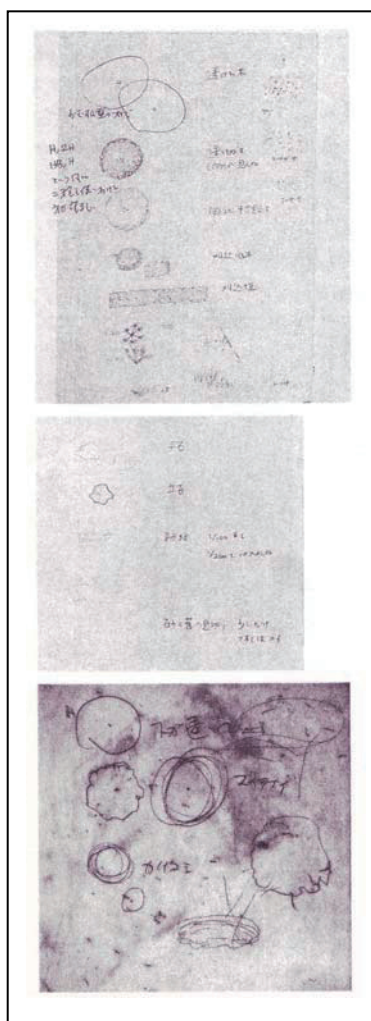


図7 樹木の描き方

#### IV. 透けた木

別の凡例を見てみると、樹木の描き方が細かく設定されている。樹木の種類により、「透けた木／透けぬ木」によってその描き方が決められている(図7)。「透ける」という言葉は西澤独自の空間概念で、雑誌などにより「透ける」という言葉はしばしば断片的に説明されている註10)。ここでまず、西澤の「透ける」という言葉を概観してみる。

西澤文隆における「透ける」の概念はただ物理的に透明であることを意味するのではない。「透ける」という感覚を西澤は、さまざまな空間体験をもとに説明している。たとえば、それは単純化した建築の細部により生まれる、響きを持った空間だという。それは開放的な空間であることはいままでもないが、意識的な開放により空間に変化を与えることであると述べている註11)。西澤は「透かす」という言葉は隙間を空けることから来た言葉ではないかと考えている。日本の気候風土より、日本の伝統建築は隙間を空けることにより構成されている。それは現代の単なる透明なガラスにより構成される空間のことではない註12)。以下に、『西澤文隆の仕事(一)』から、

「透ける」の概念に当たる言葉を抜き出してみたい<sup>註13)</sup>。

「木を透かす」というのは混み合っている枝や葉、枯れ枝を除き、…（中略）…健康的な姿になる。

「透かす」とは隙間をつくと同時に本来の姿をつくりだす。

「透綾」とは経糸を絹、緯糸を青苧で織り上げた紗で、夏の衣服に使うものだが、これを通して向こうを見ると大変涼し気な景色に見える。

「透き漆」というのは上質の漆の生地仕上げで、これを塗り込むと木目がくっきりと浮かび上がって美しく引き立つ。…（中略）…木目の美しさを引き出し上質のものにするのである。

自然のものに人間の手が加わって、健康的で清潔感のある状態にするということ、ディテールのきめ細かさが空間全体に及ぼす涼しげさや清潔感を与えるといったことが「透ける」の概念と

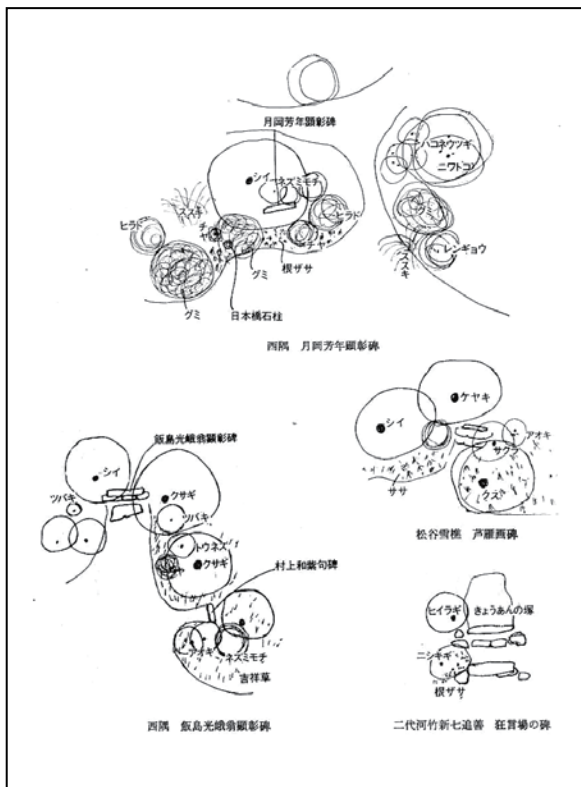


図8 樹種と透けた木

して考えられるのではないだろうか。「透ける」についてまとめると、一般的な「透明感」があげられるが、それは「開放感」をもっている。また、「健康な状態」「清潔感」といった感覚を与えてくれるものであると概観できる。

以上を踏まえ、図7に示された「透けた木」を見てみる。「透ける」とは、空間体験や自分の感じ方の問題なのである。したがって、ここで言う「透けた木」とは、空間も含んだ樹木なのであり、さらに西澤自身の感覚も含んだ空間なのである。このことを踏まえ、西澤の実測図に描かれた植物を見ると、たしかに樹木は描き分けられており、実際に見たりアルな視覚より透けた空間が描かれており、その場所の空気感を伝える図面であることが分かる。

## V. 植物の種類と透けた木 —1976年代—

1976年『西澤文隆小論集4』の百花園のページには、植物の樹種によってその描き方が細かく表されている。この樹木の描き方と凡例を見比べてみると、どの樹木が「透けた木」と西澤は捉えたのかがわかる。「透けた木」には、「シイ」「ケヤキ」「クス」「ハコネウツギ」「ツバキ」「アオキ」「ヒイラギ」などがあげられる。「透けぬ木」は「グミ」「チャ」「ヒラド」「ツツジ」など



があげられる。

以上の結果から考察すると、植物の学問的な分類や種類に従って描かれているのではなく、その場に立って見たときの樹木の「透け」具合を西澤が独自に決めていたと考えられる。季節は関係なく、落葉樹であっても針葉樹であっても関係ないようである。しかし高木には「透けた木」が多く、低木になると「透けぬ木」になる場合が多いようである。これは、高木は枝葉が視線を遮らず、下が透けて見通すことができるため「透けた木」になり、低木は視線を遮る高さにあるため「透けぬ木」に分類されるのではないかと考えられる。

## V. おわりに

西澤文隆はすでに戦時中には植物に強い興味を持っており、当時のスケッチから植物に造詣が深いことがうかがい知れた。また、彼の視点は、常にまわりの環境と植物との関係が一体的に捉えられていることがわかった。「透ける」という西澤の概念をもとに、植物は独特の描き方がされるが、必ずしも植物の種類によって「透け方」が決められているのではない。植物は樹種ではなく、その植物とその空間を含めた全体的な「透け方」が描かれている。西澤の実測図は現実を客観的に表現するにとどまらず、彼がその空間で感じた感覚をも描こうとする試みであった。実測表現の新たな可能性を、西澤の実測図は示しているといえよう。

## 謝辞

建築家・澤良雄氏には、貴重な資料のご提供を受けたほか、西澤を身近に知るお立場から熱心にご指導をいただきました。心より感謝申し上げます。もとより本稿の内容に不備があった場合は、責任は筆者にあります。

## 註

註 1) 内田祥哉「『幻の実測図』その公開に当たって」[建築と庭 1997] p.4 二川幸夫 [実測図集 2006] p.10

註 2) [実測図集 2006] 凡例「・本書は西澤文隆の作成にかかる、「建築と庭の関わり」を示す図面のうち、91点を印刷に付し、出版するものである。」未掲載のものについては[建築と庭 1997]澤良雄作表「建築と庭の分類年表」pp.10-11 参照 「未完成」であるか、または「概念図」と考えられた実測図は未掲載となっている。未掲載図は46点確認できる。

註 3) 西澤文隆「実測曼陀羅」『伝統の合理主義』丸善、1981 参照

註 4) 西澤文隆「フィリピンで会った花たち [2]」『花』社団法人大阪フラワーソサィエティ会報、1968, p.3

註 5) [実測図集 2006] の実測図には、西澤が参考にした文献が記入されたものがある。これは文献中の図面をトレースしたためであると考えられる。また、西澤は北尾春道の著書を参考にしたと考えられる。西一生、澤良雄「西澤文隆による本願寺黒書院の実測図について」『日本建築学会北陸支部研究報告集』第52号、2009 参照。

註 6) 澤良雄氏 所蔵

註 7) [実測図集 2006] p.74

註 8) 実測図に記録がある。また、西澤は実測歴を示したメモを残しておりこれによる。澤良雄氏 所蔵

註9) 西澤文隆『西沢文隆小論集 4 庭園論Ⅲ』1976, p.461 「あとがき」 「…これらの庭園の実測図は十分進行しつつあるが、ここに載せた図面は実測図というほどのものではなく、むしろ概念図に過ぎない。実測図で得た精華の図面はまた別の本で扱うことにならざるを得ない。ここで扱うのは内容的な精華の一部分に過ぎない。」と述べている。「概念図」と実測に使われる「野帳」との関わりは明らかでないが、本稿では「下調べ」という意味では同様なものとして捉えている。

註10) 海老原一郎『新建築』1986

註11) 西澤独自の言葉である「透ける」という空間表現については『INAX REPORT』No.44, 1983 および『同』No.45, 1983 参照。『西澤文隆の仕事（一）—透ける』所収

註12) 西澤文隆『西沢文隆小論集 2 庭園論 I』1975, p.27 「寝殿造において建築は“透けて”いた。透けるという言葉は開いているということと同義ではない。“透ける”ためには空間の質の高さが必要である。単純化、簡素化のなかでディテールを極力押さえることによってかえって質を純化し、空間を響く高さにまで高めなければならない。…（中略）…“透ける”ためにはまず第一に開放的でなければならない（厳密には物理的に開けてなくても自由に流動する空間の質があれば“透けている”と呼んで差しつかえないのだが）。…」建築細部の構成により、「透けた」と感じるものになると述べている。

註13) 『西澤文隆の仕事（一）—透ける』鹿島出版会 1988, p.32

註14) 『西澤文隆の仕事（一）—透ける』鹿島出版会 1988, pp.32-33

#### 参考文献

1. 西澤文隆実測図集刊行委員会『建築と庭 西澤文隆「実測図」集』建築資料研究社, 1997
2. 西澤文隆実測図集刊行委員会『日本の建築と庭 —西澤文隆実測図集—』中央公論美術出版, 2006
3. 西澤文隆『フィリピンの日々』2003
4. 西澤文隆「フィリピンで会った花たち〔1〕」『花』社団法人大阪フラワーソサイエティ会報 1968, pp.3-4, p.9
5. 西澤文隆「フィリピンで会った花たち〔2〕」『花』社団法人大阪フラワーソサイエティ会報 1968, p.3
6. 西澤文隆「フィリピン・パナイ島の民家」『建築家のスケッチ集』1977
7. 西澤文隆『西澤文隆の仕事（一）』鹿島出版会, 1988

#### 図版出展

- 図1. 西澤文隆によるメモ 澤良雄氏 所蔵
- 図2. 坂倉準三と西澤文隆『西澤文隆の仕事（三）—つくる』鹿島出版会 1988, p.141
- 図3. ル・コルビュジェと坂倉準三『現代日本建築家全集 11』1971, p.77
- 図5. 「西澤フィリピン時代のスケッチ」『フィリピンの日々』2003.7
- 図6. 西澤のメモ①—③ 澤良雄氏 所蔵
- 図7. 「樹木の描き方」[実測図集 2006] p.74
- 図8. 「樹種と透けた木」『西澤文隆小論集 4』1976, pp.206-207

(平成 21 年 3 月 31 日受理)